

見ゆるは幽に星ばかり

三五の月よいざとはむ

何をしたまふ我母は

まだ起きつらむかいぬらむか

明日をも知らぬ露の身の

うたふも此世の名残りにと

抜けば玉散る日本刀

月に閃めく秋水か

血潮沸ざれる眼には

豺狼の敵もあらなしや。

五

折しも響く喇叭の音

暫しまどろむ兵士の

夢を破りて呼びたてぬ

強き士官は時なりと

故郷の方に打ちむかひ

さらば両親はらからよ

雄々しくわれは戦ひて

かほる勳功を立てゝみむ

武運拙く死するとも

魂は翔りて東なる

皇國の櫻に宿とりて

花に色香を添なむと

腕をふりつゝ濶歩して

たち出でたるぞ勇ましき。



ある夜音楽的小集會に

ものして

すみ

友はいくたり

絃の音に

れ

かよへるまこと

美しく

調べもたかき

甲斐が嶺の

軒端の松に

月すいし

五人むたり

其がなかの

中のひとりは

五とせか

六とせむかしゆ

いとほしの

なさけもおはれ

友にこそ

~~~~~

えびかづら(甲府魚町二丁目小林静軒方)

むら子

其の里に遊びてみつも甲斐がねの

葡萄の露にまた歸りこし

みつ子

入千草の中の一つをととりてむと

立ちよる袖のその露をかし

いま子

いさゝかの風をたよりに舞ひて來し

小蝶とまれよ野の葡萄かけ

春子

夕暮の葡萄の園をさまよへば

夏に知られぬかせかをりけり

しら桃

山かげにひとりさびしき狀見せて

誰をまつらむか白百合の花

桃子

さゝ舟に乗ぐむと川の邊に立てば

たちしばかりに涼しかりけり

みどり

夕立の過ぎしみを空を眺むれば